

「自民党の選挙戦略が結果的に立憲を利する形になった のでは？」

平成 29 年 10 月 24 日

●コロンさんからの質問

今回の自民党の選挙戦略が、立憲が躍進する予測が出てきても希望の批判に偏っていて、左翼マスコミと共に結果的に立憲を利する形になってしまったことが残念でした。希望は、政策が自民の補完と揶揄されるくらい近いので、遅かれ早かれ希望の中の民進が立憲に流れていくことは予想がつきます。ならば、批判すべきは、党首が革マル派とつるんでいる疑惑があるようなとんでもない立憲を批判すべきだったのではないのでしょうか。

●西田昌司の答え

立憲民主党は今回の選挙で「躍進」と報じられましたが、その心は、小池さんに「排除」されて可哀想だから助けてあげようという判官贖罪だったのだと思います。

立憲民主党の主張は共産党やかつての社会党とほとんど変わりがありません。共産党や社会党は共産主義・社会主義を標榜する政党ですが、冷戦終結後はその方向性が疑問視されて退潮しました。今でも一定数の共産党支持層が残存してはいますが、社会党はかつての民主党に吸収されてしまいました。立憲民主党に集まった議員は自らをリベラルと称する左翼勢力ですが、中身に新しいものは何もありません。立憲民主党は表向きは共産主義・社会主義を標榜しているわけではありませんが、その根底にあるのは古めかしい左翼イデオロギーです。

日本は敗戦後に GHQ に占領されて歴史観・価値観を根底から変えさせら

れてしまい、交戦権を否定する現行憲法を押し付けられたり、平和教育・人権教育に毒されることで、自分の国は自分で守るといった気概をなくしてしまいましたが、そういった戦後の価値観を全て肯定しているのが左翼勢力です。もちろん、戦後の全てが悪いとは私も思いませんが、（単に GHQ にとって都合の良かった）占領政策を日本人がありがたく頂戴する姿勢は、日本人としての矜持を失った情けない姿勢だと言わざるを得ません。

交戦権を否定した現行憲法を一言たりとも変えまいと、金科玉条のごとく守ろうというのが左翼勢力の立憲主義なのですが、そんな彼らを支持する国民は今や少数派ですし、そんな姿勢では国は守れないことに多くの国民が気付いています。今日、日本が平和国家でいられるのは憲法 9 条のお陰ではありません。東西冷戦時代は、米ソという 2 つの超大国が大量の核兵器を抱えてにらみ合っていた時代です。そんな時代ですから逆に小さな紛争すら起こり得ずに結果的に平和が保たれていたのです。しかし、冷戦終結後に世界は大きく様変わりしました。

冷戦が終結してソ連が崩壊し、ロシア共和国をはじめとする 15 の共和国が独立しました。冷戦中は西側と東側の経済的交流はありませんでしたが、今やロシアや中国が西側と交易をする時代となりましたし、その意味では平和になったと言えるのかもしれませんが、しかしその一方で、冷戦の枠組みがなくなってしまったために各地で様々な紛争が勃発する時代となったのです。

中国は領土的野心を剥き出しにして海洋進出を企てて、周辺諸国との間に摩擦が生じています。また、北朝鮮が核開発に励むのも、彼らの存立のためにはアメリカと対等に渡り合えるようしっかりとした武力を持たんと覚悟を決めているからです。このように、今や左翼勢力が是としているような平和主義は世界に全く通用しないことは明白ですし、ゆえに国民も今や憲法改正派が多数を占めているのです。

今回、立憲民主党が議席を増やしたといっても、国民の判官贖罪による一

過性の現象と考えられますし、多数派の国民が彼らの欺瞞に気付いているとなると、そう目くじらを立てることもないでしょう。それよりも、多数派の国民に対して戦後レジームの正体を地道に丁寧に語りかけることが何よりも重要と思います。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>